

## 論文内容の要約

論文名	Discriminating Imaging Findings of Acute Osteoporotic Vertebral Fracture : A Prospective Multicenter Cohort Study
氏名	Khalid Mohammad Qasem
<p><b>【目的】</b> 骨粗鬆症性椎体骨折の治療方針を立てる場合、受傷後の経過期間がひとつの指標となる。しかし、骨粗鬆症性椎体骨折新鮮例の鑑別手段に関する報告は少なく、その鑑別は未だ困難な状態である。本研究の目的は骨粗鬆症性椎体骨折における画像所見の経時的変化を検討し、新鮮例と陳旧例の鑑別点を明らかにすることである。</p> <p><b>【対象】</b> 骨粗鬆症性椎体骨折に関する多施設前向き研究に登録された症例の内、受傷日が特定でき、受傷後2週間以内及び6ヵ月時点で単純X線とMRIの両者が撮影可能であった136例139椎体を対象とした。</p> <p><b>【方法】</b> 受傷直後（2週以内）及び受傷後6ヵ月の時点において、単純X線において前方椎体高比率を正常隣接椎体高との比較で算出した。また、MRIのT1強調像において椎体後壁の低信号性変化の有無を検討した。新鮮例の診断を目的とした場合の前方椎体高比率のカットオフ値はreceiver operating characteristic (ROC) 曲線を用いて算出した。</p> <p><b>【結果】</b> 受傷後2週以内の平均前方椎体高比率は84.6%であったが、受傷後6ヵ月時点では63.7%と有意に低下を認めた。MRIにおいて、受傷後早期には椎体後壁の信号変化は116椎体（83.5%）に認められたが、6ヵ月時点では58椎体（41.7%）と信号変化を有する症例は減少していた。ROC曲線の解析の結果、新鮮例診断の基準を前方椎体高比率75%以上とした場合の感度・特異度はそれぞれ85.6%、67.6%であり陽性的中率は72.6%であった。さらにMRI T1強調像における椎体後壁の信号変化を加味して考察した場合、感度・特異度はそれぞれ87.1%、71.9%であり、陽性的中率は87.4%とそれぞれ上昇を認めた。</p> <p><b>【結論】</b> 本研究の結果、骨粗鬆症性椎体骨折後早期においては、比較的椎体高が保たれていることが判明した。骨粗鬆症性椎体骨折において、単純X線で前方椎体高比率75%以上及びMRIにおける椎体後壁の低信号性変化は、新鮮椎体骨折の鑑別に有用であった。</p>	